

"JelLee>e"

>el /0 lYa Jeμ

-ル: eJル

eJル: Jeμeλ -μe-Z-μλ

『ソノヒノキ』

メル20年リュウの月セレンの日

著: エスト

訳: セレン=アルバザード

<cμ e> JoμeC, JoμeC e> h-μ, h-μ e> Veμ, Joλ
Vel <-ル> <c-, <cJ oμ Coo> Je JJoλ,, Ca Jel eC
λce λ-ル <c- C eC la -l>-λ- — 4-, eC Ccλ)- λ-ル
la -l>-λ-,

-λ λ- θeJ J- S-λl JoλC cλJ daa<, λcλ-, -λ
Ccl λ-Veμ,,

-λ <ccl> >-cλ e λoJ Joλ Joλo,, λo> -λ λ- λoJ
ル->eJ Yaλ leλC,, 4-λ cλJ -λC cλcμcaJ <-μ
h-μ Yaλ VoμC>-cλ,, h--λ Ca eC eel -λC c> Caμ
λ-, Z-l -, Ca eλ Yaλ -λ,,

c S-λl, l-Cc> -l eZ,, JoCλC> - JoCcl, cλ θ-θλ,,

Ⓞ--...Ⓞ

λc Joλo, -λ λC-> c JoCcl,, 4-λ -λ h-lJ-λ> -
>oJル,,

ⓄYeJ --, Joλ λ- -λC eCⓄ

Jc-S Ccl >eθ l'-λ Jccλ-, C-l -λ λ- Ve> - loCcl
leλ Ca e> >eC - θo -λC, JoCcl -λC,, Ceo, -λ eλ λ-
Ve> - loCcl leλ θo JoCcl Ya C-l - loCcl leλ θoθ-lJ
JoCcl Ya, >-λ -λ cλ μcJ θλ-λ C'eμC,,

Ⓞ-λ lKcJ λ-λ Jec...Ⓞ

-λ Joλo> >e - λoJ J- Ca eZ le Yaλ Ccλ -λ λ-,
-λ leYa> cλJ,, <-μ h-μ l'-λ λ- oμ <-μ Veμ,, -λ
λ- Ve> >cλ Vel C-l λ- JoCcl λ-l C-λ,,

λc <-μ h-μ leeV, -λ ho>c> cλJ,, c> Ca <oλc -λ
cλJc> eel l--C J-eλ >eθ,,

Ⓞh3μδΩ

Ca eJλ Yaλ le eel l-λC λ- l-λ> -λC JoJoδ Joλ -λ
cλC> l-λ> e λoJ C-l, h-o, l- >c -Ca,, 4-λ cJル l-,

白は青へ、青は赤へ、赤は黒へ変わり、そして闇が世
界を覆った。1日はいつもと同じように終わろうとして
いた。しかし世界にとって何でもないその日は、この少
年にとっては非常に重要なものだった。

テラスにて、日没を見ながら私は悩んでいた。いや、
憂えていた。

心の中でここにいる私の体を眺めてみた。人形の様
に立っている自分が見て感じられた。この目は死人の目
のように赤い光を映していた。そうか、これが今の私の
顔か。不気味だな、私ではないかのようだ。

テラスを離れ、私は部屋に入った。椅子に座り、カレ
ンダーを見る。

「ああ…」

そう呟くと私は椅子から立ち上がってベッドで仰向け
に寝転んだ。

「ああ、腐ってるねえ、私の心は」

天井には鏡が付いている。私はこれが好きだ。だが、
もしこれが落ちてきて首を切られたらと考えると…怖
い。いや、首が切られるのが怖いというより、頸動脈が
切れるのが怖いのだ。鮮血が飛び散る様を見るのは嫌だ

「私は生きてるのかねえ…」

自分に再度呟いた。私以外は誰も居ないこの部屋で。

目を閉じた。私が感じている赤い光は黒い光へと変わ
っていく。闇のせいで怖くなった。が、同時に安心も感
じ始めていた

赤い光が消えると私は目を開けた。すると、鏡の向こ
うに一瞬彼女の顔が見えた。

あれ？

ということはあの美しい顔が私の隣にいるのではない
か？しかし隣を見るが、いるはずもなく、ただ蚊が居た

μcε ρcυ υ-,

Ⓞ ρcυλcε

ρcυλ μcε eλ< ρcρ -λ,, -λ ρeρ ι-υ >cγa ρa,, ρ-ι
ρa eλ<c> -λ,,

Ⓞ εeοfε

-λ ρρcλc> >e - ρρcl, <clυ ρ-ρυ,,

Ⓞ <cυ λeηf...ε

ρa λeλ ιaλ-> >e -λ,, -λ λ- λ-a eλρc >cl> υ-λ,,
ρ-λ> -λρ ρcl υcl,, ρc ρcl ρcl ρcl >e ρa ρec,,
-λ λ- h-ρ γ-c -, λcel -λ eλ- ρcl,, ρ--ρ, -ι- eυ
-λ ρcρ ρc- ρec,, -λ ρcl ρa ρλcρυ ιe λcl ρλ> -λ
ρeρ λcυ,,

-λ λe hcυ,, ρ-ι -λ eρ -υ> - γaa,, -λ μ-ρι ρeλ
λcρcρ -ρc ρcl,, ρcλ -λ e> υcl <-λ- - <c ρcυee,,
-λc, -λ eρ λecρ ρ> eλυc <cλ ρa eρ υclλ λ-,

ρe- -λ λe -λ, -λ ε-ρλ υ-λ -λ,, -λ eρ <cc>, γ-λ
-λ υ-μ-e λcυ <cc>,,

-λ eρ -υ> - γaa >-λ -λ eρ <cc>,, ρ-c> -λ >cγa
eλ< ρa ρeλλ,, ρeμ, ι-λ <cc> ρe- eλ< ρeλλ <cc> >-λ
ιa eρ <cc>, -υ>-δ γ-, -υ>-, h-γa -ρeλ ρcλ>-,
-λ eλ cλυ >cγa ε-ρλ, λeγa> >e cλυ,, -λ λeγa>
γaλ ρaμ, hc>c> γaλ ρeυ,,

ρcυρ Ⓞ ρc-ι ρ-ιρ μ-ρ>eυ,, ρ> -λ -ρρ-ρ ι- λee>e
ι-λρ ρec,, λccλ, -λ ρcc- >cγa ι- c> -λ ι->-ρρ
ι-ε

-λ λ-ρ ρc c> ιe λeλ ρec,, ρa -ρ h-ρ ιcρλ λeλ -λ
-ρρ ι-, hel, -λ ρeμ>-ρ λeλ ι-λ- ρcλρ ρ-εeυ
-ι>- λc>,,

-λ υ-ρι-ρ λe υ- μ-ρ ρcρc υelρ <μe>eλ μ-
-λρ,, ρe- -λ ρe>-ρ ι-, ρcλ -λ λe -λ c>eλ ρaμ,,

だけだった。

「やあ」と声をかけると蚊は逃げ出した。途端に殺意が
沸いた。が、逃げられてしまった。

「クソッ！」

私はもう一度椅子に座ると、カレンダーに目をやった。

「今日だ…」

またこの日がやってきた。とても嬉しくて踊りたくな
るほどだ。

拳を見ると、手首に傷があった。また切ったらどうな
るんだろうな。痛いだろうね。泣くかもしれないなあ。
そもそも、何でこんなことしたんだろうなあ。この自問
によって私は今まで生きてきたのだ。

劣等でもないのに何も上手くできない。何でもある程
度はできてしまうので、情熱を注ぐということができな
いのだ。力ある無能力者だな、私は。そしてそれは矛盾
的だ…。

もし私が他人だったら、こんな男、殴っているだろう
な。だって私はただの怠け者なのだから。こんな自分は
愛せない。

何にも上手くいかないのは私が怠けているからだ。な
のに怠惰を直すことができない。怠け者は怠惰だから怠
惰をも直そうとしない。始末におえないものだ。

拳を見るのをやめると、私は再び目を閉じた。現在を
閉じ、未来を開いた。

「もう何年になるかな」と小声で呟いた。「あの美しい姫
と会ったのはいつのことだったか。いずれにせよ、私は
始めてあったときに彼女のことを愛してしまったのだ
よ」

あの日、私は何を考えていたのだろう。彼女に出会うな
どとは予想だにしていなかっただろう。似合わないジャ
ケットを着て、何とはなしに外へ出たのだ。

そして家の近くの暗がりに人が居るのに気が付いた。
もし彼女を無視していたら私は今の私でなかっただろ
う。

-Λ ZccΛ-Γ ΓcΓo, Λ-Γ ΛcΓ >-Λ <c-Λ I-ΛΓ ΓcΛΓ-
Λ- Γa,, I- ΓoΓ -Λ -Γ YaΓc, Γ-I I- eΓ
I-ΛΓ/<-V/ΓoΓ JeJ,,

Λee>e — -Λ IaΓ -ΛΛ I- IeΛ Jo- — Λ-ΓI-Γ -Λ,
-JeΛ-Γ -I -Λ,, I-ΛJ -J Λoλ I- -JeΛ Vcl I-ΛΓ Jo-
Λ-,,

-Λ -ΛΛ-Γ J-Γ I- IeΛ YaΛΓ Γ-I -Λ Λ-Γ Λee>e eΓ
Λcl< -I-,, -Λ -ΛΛ-Γ I- IeΛ Γa ΓoΛΓ Λ- θeJ,, 4-Λ
I- <Me>-Γ -I -Λ J'eΛΓ,,

I- Γcl Λc- <cl JeJ,, I- J-ε-ΓeJ J-I- Γ--<,
Λc>J λaaμ, IaJ eΛYe oΓeΛ >eIJ, λc-I YeΓ/<cμ
Γ-eΛ oJΛ JeJ,, --I, >ccl Γ-c Γ-eΛ IaJ eΓ c>Ya
JeJ,, >ccl Γcl Γ- <oΓ 4-Λ ΓaaJ <oΓ V-ΓIeJ
-I>cΛΓ I--Γ JeJ,,

Λee>e IaΛ-Γ <Me> -Λ,, 4-Λ -Λ oV-Γ Vcl ΛoJ,,
Λee>e:ΓcJΓ ⑥-c, ΛoΛ J-ΓcΓ ΓYa⑥

-Λ IoΓcΓ Vcl eJΓ e MeΛJ IaΓc,, ΓoΓc, -Λ Γcl-Γ
Λ-Veμ >-Λ Ia <c-Λ eΓ Λcel V-Γ-c,, Γ-I Ia I-Λ-Γ
YaΓ -I -Λ,, ΛcΛΓ, -Λ -IΓ-Γ V-Λ Ia >-Λ -Λ <eelcΓ
Ia,, Γco Λee>e Λ-Γ I-ΛΓ -Λ,, -ΛJ eΛ Jeμ-Γ eJΓ
e ΛoΓ ΓcJ Γ-I Λ-Γ Λcl,, 4-, Λ-Γ Λcl >-Λ Γco -ΛJ
Λ-Γ ΛoΓ,,

Λc ΓoΛoΓe, Ia ΛΓ->-Γ,, c> Γa, -Λ Λ-Γ Ia IeeV
<-I -Λ,, Γ-I -Λ Λ-Γ -ΛJ -Γc JeΛ >e ΛoΓ c> Λe,,

-Λ ho>cΓ cΛJ,,

Λc I->-Γc, -Λ -Γc Γe Λee>e c> Γa Jel Γ-Γ
J-IΓ,, I- IaΓ V-Γ -Λ JeeMe,, -ΛJ ΛoΓ Γoλ e <e
J-IΓ -ΛoΓ,, 4-Λ -Λ J-cΛ I- eΓ <c-Λ- Vcl -Λ -Γc
I-,,

-Λ Λ- Λoθ λa Γ-I -I -Γc I- c> <cJ,, Γa eΓ >-Λ
-Λ Λ- Λcl/Ve> -Vcμc,, -Λ ScY λ-ΓJ ΛoJ I<cJ <-I
-Z Γ-Γ -Γc,,

暗がりを覗き込んだ私は驚いてしまった。というのも、
とてつもなく美しい小さな少女がそこにいたからだ。彼
女も私と同じで子供だったが、美しく華麗で魅力的だっ
た。

姫——と私は呼んでいるのだが——は私を見ると美し
く微笑みかけてきた。天使の微笑みは美しいが天使でさ
えこのようには微笑めないだろう。

「嬢ちゃん」と呼ぼうとしたが、彼女があまりにも美
しいので姫と呼ぶことにした。戸惑いながら彼女をそう
呼ぶと、彼女はゆっくりと私に近づいてきた。

彼女は髪を長く伸ばしていた。桃色のシャツに薄青い
色のセーター、フリルの付いたページのスカートの、頭
につけた白玉のアクセサリ、とりわけスカートの大き
なりボンが変わっていた。リボンには2本の紐が垂れて
おり、彼女の膕まで届いていた。

姫が私に近づいてきたが、私は身動きを取れなかった。
「やっと見つけた、あなたを」

姫は始めに小声でそう言った。全くわけがわからな
かった。面倒なことになるのではと、不安な気持ちがよぎ
った。が、結局、姫は私に何も望まなかった。姫に一目
惚れしてしまった私は彼女を助けてあげようと思った
が、姫は何も望まず、ただ私の隣に佇んでいただけだ
った。互いに名前さえ知らなかったが、私達は幸せだった。
ただ一緒に居るだけで。

12 時を過ぎると彼女は立ち上がった。私は別れを悟ると
共に、再会をも悟った。

私は目を開けた。

彼女にあって以来、私は毎年この日になると姫に会いに
行く。彼女はいつも私を待っていてくれる。私達は会っ
てその年の出来事を語り合うのだ。そして彼女に会って
自分と彼女の存在を確認するのだ。

今日も彼女に会うと考えると少し緊張する。緊張の半
分は幸福で、残りの半分はしかし死の恐怖である。私は
毎年彼女に会って、生きるべきか死ぬべきかを決めてき
た。

「- l- leeV -l c> l->-)c, l-)ac)o-,
⊙ol (Ya eλ lKcJ <-l,)oλ λoλ <cλ <-λ - (Ya Yaλ
V)M C JeeM
-λ eλ λ- Jcc- Ve> - (a MeλJ (-l c>)aM Je
(cλ)-, <cJ, -λ λcel Jeλ Ya l- cλJ λcc-, -λ
λ-))o- Je l->,,
h-c, -λ λ- Ve> - V)M C -lKcλ -λ Jeλ-c)-c
λoλδ -λ -leJc) - λoJ,,
-λ -)c l-λ l- Je)oλ, λ- l-λ λcl,, (-l cλJ e
lee>e -Jeλ V-λ -l -λ Jec,, -λ l)εc) eel)oλ
l-J,, (aM, lee>e/V)M C eJ)o- - >eJc,,
4-λ)-c()ec>- (cJ(c) -l -λ Yaλ V)M C)o)
lee>e eλ V)λ, Yaλ -λ λoλ lee>e eλ V)λ,,
(eo,)a eλ (eo,, -λ)c-)c-)c()c()c, (-l la
)oJ oλ),
⊙-l)oλ eJ (c ScY Vcl λoJ -)c l- -Z⊙
)oλ λcV ⊙-λ ScY Vcl (a eλ >-λ -λ λ- Ve> - V)M C
(-l >-λ lee>e S-θ -λ leλ VeM J/Yaλoλr⊙
h--λ, -λ λ- Ve> -l eλ V)M C (eλ (a -, -λ λ-c
θeJ >-λ (a λ-, -λ l-θλ Je <cl/eλc, 4-λ -λ
>Ya) l-J cλ eel,, (a eλ l-λ)l-J,, (a l-λ)l-J hoλ
oδ Jcc- lee>e,, c> JeJ, -λ oδ-c >c< λc- e
lee>e,, -λ >-leJ (a)oλ Je >oλ -lKcλ lee>e eλ
λ-)l-c (a)oλ (cJ,,
-λ eVc) l-λ)l-J -)-->,, lee>e eλ λ-)leJ -λ
λ- θeJ)o) l- eλ λ-)l-c -λ oδ λc- l--c λ-,
-λ (cc- l-, h-4a -λ λ- θeJ,, -λ λ- Ve> - Jeλ
Ya/Ya) c Ya lee>e >cl (-λ (cc- l-, λc λo))
o) eλ)c()c, -λ λ-)l-c) la leeVeJ -λ,,

初めて出会ったとき、別れ際に彼女はこういった。
「貴方が生きるべきでないなら、次に会った時に私は静
寂な死を貴方に与えるでしょう」
今日までこの言葉を恐れたことはなかったが、今は恐
ろしく怖い。今年こそあの美しい緑の瞳に殺されるかも
しれないのだから。私は始めてそう感じた。
それにしても自殺を図ったものが死を恐れる？——私
は自嘲した。
いつものように彼女に、姫に会いたい。そして幸せを
感じたい。だが、姫の目は私に微笑みかけてくれるだろ
うか。私は顔を手で覆った。姫と死とが天秤にかけられ
ていた。
すると私の中のもう一人の私が嘔きかけてきた。姫は
死と等価なのか。お前は姫を自分以上に愛することはで
きないのか——と。
否、断じて否。私はもう一人の私を追い払おうとした
が、奴は続ける。
ならばなぜ姫に会うかどうかを決めあぐねているのか
——と。
「私は死が怖くて迷っているのではない。姫に生きる必
要の無いくだらない人間だと定められるのが恐ろしいの
だ！」
私は声に出して奴に答えた。そうか、私は死が怖い
のではなく、それが怖かったのだな。そのことで私は悩ん
でいたのだな。私はゆっくりと長く息をついた。顔から
手を離す。左手だ。この左手だけは姫に触れたことがあ
る。以前、左手が姫の髪の毛に触れたことがあるのだ。
私はそのことをよく覚えている。尤も、姫はそんなこと
知る由もなかったろうが。
私は左手を頬にあてた。私が姫の髪に触れたことなど
知らないのと同じで、姫は私が悩んでいることも知らな
いだろう。姫は何ひとつ知らないのだろう。だが、私は
彼女を愛している。そしてそのことが私を悩ませている
のだ。姫を愛せば愛すほど姫に殺されることが怖い、姫
に否定されることが怖い。私ともう一人の私との言い合
いが終わると、奴はいつのまにか消えていた。

la λ-λ -λc - λ-λ Jecδ -Z la ε-λ >c4a λ-λ
Jecδ -Z -λ...δ λccλ la leeVeλ -λ,, λ-λ, la
leeV-λ -λ >-λ -λ ε-λ >c4a la,, -λ eλ λcμ >c4a
la >-λ -λ Scδc) λoλ -λc λee>e -Z,,

Je λλoλ, λ- laλ- λoλ λc V-λZoλ,, c) clλ-λc, (a
Jel, λc V-λZoλ...,, λ- λeλ - λoλ c) λ-λc) λoλ
Jccλ-,, λ-λ λ- λccλ λoλ λoλ le cλλ le λoλ
Jccλ-,,

λoλ λ-λ-λc (a <c- eλ cλλcλ Veμλ λ-λc λ- c>
λ->-λc,, λcel, λ- λe-λ V-λ (a <c-/eμλ e 4aa>-,,
λoλ λ-λc (a Vλ cλ cλλ λ-λc,, (c-λ) λ- λ-λc μec-
cλ,, λoλ λoλ λeλλ-λc λo-,,

Ⓞλ λ4a eλ λcλ <-λ, λoλ λoλ <cλ <-λ - λ4a 4aλ
Vλμλ Jeeμe

λ- λ- eλ Ve> - Vλμλ,, -λoλ λoλ Jec Jea λ-,,
h-c λ- Jeeμ eλ λoλ Jec Jea λ- e4o,, λoλ Jec Jea
λ- λ->-λ λ- λcc- λoλ λoλ λ-λ,, λ- λc laλ- λoλ
λoλ λ- λeλλ (ea λ-λ Jec 4a λoλ,, h-4a (a -λc-
λ- λcc- λoλ λoλ λ-λ,, λoλ λ-λ Jea Jeeλ λ-λc
Vλ Jec >-λ λ- λcc- λoλ,, cλλ λ-λc eλ -λc) (a
λ-λc e4o,, λ-λc, λ- laλ- V-λ λoλ e4o,,

<-λ eλ λaa<, λcel, λoλ V-δeλ -λa,,
λoλ hel λcλ ->-λcλ λoλλeλ -λel λoλλ V-λ λ-,,

-λ >4aλ λ-λλλ-λ c λ->-λ, λe4aλ cλλ,,
-λ -λc λ-λ lee>e,,
-λ μcλ lee>e 4aλc -λ,,
-λ λ- μe< >-λ -λ Jeeλoλ λeλλ, Scδeλ λoλ λe
V-λ -Z,,

奴は忠告に疲れたのか、その必要がなくなったのか、
はたまたそれ以外か、いずれにせよ奴はもういない。い
や、私が奴を必要としなくなったから奴は消えたのだ。
なぜなら、私はもう行くかどうかを決めたからだ。

彼はいつも8時すぎに来る。毎年、この日の8時すぎ
に…。彼は私を見つけるとすぐに微笑みかけてくれる。
そして私の好きなあの瞳でもって私の心を魅了してくれ
る。

私は彼と初めて会ったときに、この世界が彼にとって
なんら魅力的でないものだということを知った。彼の目
を見て、私は彼がこの世界や他者を破滅させかねないと
感じた。そして彼は寂しそうだった。だから私は言った
のだ。

「貴方が生きるべきでないなら、次に会った時に私は静
寂な死を貴方に与えるでしょう」

—と。

彼は死を恐れないだろう。だから私は彼を殺すことが
できるのだ。私が彼を殺せる理由というのを彼は知って
いるのだろうか。彼が自分より私のことを愛してくれる
からこそ私は彼を殺せるのだ。私に殺されるかもしれない
と思いながらも私に会いに来てくれる。それは彼が自
分より私を愛してくれるということ。だからもし彼が愛
してくれれば彼をもっと愛し、彼を殺して彼の魂を得る
だろう。今年の彼の瞳はどのようなものだろう。そもそ
も来てくれるだろうか。

日が暮れていく。早く来すぎたのかもしれない。
彼を待ちながら、彼と私の思い出を思い出し始めた。

左手を頬から離すと、私は目を閉じた。
姫に会いたい。
姫に否定されたくない。
悩みを断ち切り、行くか否かを決めた私は平静さを感じ
ていた。

-Λ heleJ ->-lcJ ɔʔeΛ ʌɔʔ ʔɔʔ -Λ ʌɔ c>
clJ-Λ,,

— Λee>e l'-Λ -ʔʔ JeΛ c> ʔa Jel

-Λ Jel eΛ- ʔ-eΛ ʔɔʔ ʔɔΛ l-J,,

ʔɔʔ -Λ, -Jel -l -Λ Je l-Λʔ — ʌɔl JelΛee>e
l'-Λ ʔcc-,,

私は毎年するように、彼女と私との思い出を思い出して
いた。

——その日に会うことができる姫

私は手で、左手で目頭の涙を拭いた。

私の頭の中で、美しく微笑みかけてくれていた——私の
愛するソノヒノキが。